

# 「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」 ーヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語りー (I)

ラインハルト・ヘッセ\* 編著

船尾 日出志\*\* 城田 純平\*\*\* 今泉 尚子\*\*\*\* 訳

\*フライブルク教育大学元教授

\*\*名誉教授 \*\*\*本学非常勤講師 \*\*\*\*本学学生

## “Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste” Die Geschichte von Hilde und Rose Berger (I)

Reinhard Hesse\*,

Hideshi FUNAO\*\*, Junpei SHIROTA\*\*\* and Naoko IMAIZUMI\*\*\*\*

\*Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland

\*\*Professor Emeritus of AUE, Kariya 448-5542, Japan

\*\*\*part-time Instructor of AUE, Kariya 448-5542, Japan

\*\*\*\*Student of AUE, Kariya 448-5542, Japan

### 訳者による簡単な解説

船尾がラインハルト・ヘッセ先生の『哲学の根本問題 真理と権力のせめぎ合いのなかで』(Worum geht es in der Philosophie?: Grundfragen der Philosophie zwischen Wahrheit und Macht)を翻訳し、学文社より刊行したのは2009年のことであった。そのご縁もあって、船尾はヘッセ先生と家族ぐるみのお付き合いをさせていただくようになった。2014年9月にスイスのクロイツリンゲンにあるヘッセ先生のご自宅を訪問した際、1冊の本(“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger“ Haland & Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013)をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく、艱難辛苦のナチス時代を乗り越えて生き抜いた2人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。あえてそのエッセンスをまとめると次のようになる。

「ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーは移住してきた移民ユダヤ人の両親の子どもとして第1次世界大戦の時期にベルリンにて誕生した。2人はすでに若くして政治意識を有し、最初はユダヤ人青年グループのなかで、後には共産主義運動のなかで、そして最終的にはトロツキー主義運動のなかで活動した。第2次世界大戦の勃発直前に一家はドイツを離れねばならなかった。ロゼはフランスに逃げる事ができたが、ヒルデはウクライナのボリスロウにおいてバルトホルト・バイツに庇護されたユダヤ人たちの1人となった。バイツが徴兵された後、ヒルデはプラスツォウ強制収容所に輸送された。そこで、かの女はタイピストとして、オスカー・シンドラーの後に有名になる名簿を作成するという仕事を与えられた。その偶然が、かの女の命を救った。」

序文や結語でヘッセ先生ご自身も論じておられるが、この本の大部分は2人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

#### 導入

バルトホルト・バイツによる序言

ヘッセ先生による序文

#### I ヒルデ・ベルガーの物語り

テキスト1「ヒルデ・ベルガーが1914年から1945年までの自分史を語る」

テキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」

テキスト3「ハロルド・ツイリンおよびマリー・ツイリンのヒルデ・ベルガーとの対話」

#### II ロゼ・ベルガーの物語り

テキスト4「マリー・ツイリンのロゼ・ベルガーとの対話」

テキスト5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」

ヘッセ先生による結語にかわる書簡

今回翻訳するのは、導入部分とテキスト1の途中までである。訳者の3名はすべてヘッセ先生と懇意にする者である。もちろんヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳、および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。なお原文のイタリック体で強調された部分は翻訳文でもイタリックで表記した。( )内は訳者による補足であるが、《 》内は原文の注釈等である。

キーワード:バルトホルト・バイツ(Berthold Beitz)、ホロコースト生き残り(Holocaust-Überlebende),



## 導入

### 1. ベルトホルト・バイツによる序言

ヒルデ・ベルガー (Hilde Berger, 1914-2011) およびわたし、つまりベルトホルト・バイツ (Berthold Beitz, 1913-2013) は、ボリスロウ (ウクライナ西部の都市) でわたしたちの人生のおそらく、最もドラマティックで、最も心に刻まれ、そして最も困難な時代を生き抜いたとき、2人ともまだ20代であった。ヒルデは、ユダヤ人受刑者として、さらにわたしの第2秘書として、常に死によって脅かされていた。数千人の従業員を有する戦争遂行上重要な「カルパティア石油商会」の長であるわたしは常に、当時の権力保持者とうまくやっていくように強いられた。「当時の権力保持者」とは、SS (親衛隊)、ゲシュタポそして騎馬警察隊である。経営が順調であったときだけは、わたしは連中に敬意を払っていた。そのことは、自分の意志を貫くのに必要なことであった。

ヒルデは見目麗しい女性で、知的な人間で、そしてしっかりとした人格者であった。かの女は1930年代のベルリンでナチスと戦い、そしてそのために重懲役刑務所に入れられた。かの女には信念があり、その信念に忠実であった。

ボリスロウにおいて体験された物凄い破壊が、わたしたちを人間的に互いに近づけ、そして似ていると感じさせたときでさえ、わたしたちはしかし内面的に互いに距離があるままだった。わたしのような普通の人が自然に行うような行為を、ヒルデは理解し、そしてそれに共感していた。そのことは、虐げられている人の味方であるヒルデにとって、まさに実際にも重要なことであった。ヒルデはしかし、わたしはやっと後日に意識したのだが、わたしが一虐げられている人にたいしてもまた一いつもおかれていた複合的かつジレンマ的状态に、自分の身を置いて考えることはできなかった。そのことを、ヒルデはようやく後に、つまり戦後になって、つまり数年の間隔において人間的に理解し、推測し、そして受け入れることができるようになった。

ヒルデが高齢になって再度、わたしと接触し、そして電話でわたしたちの人生について腹藏なく意見交換できたということは、わたしの人間としての琴線に触れた。さらにヒルデの死の少し前に、わたしはかの女と話す機会をもった。

この本が、ヒルデの人生と厳しい時代におけるわたしたちの出会いへの記憶を後世のために留めているということは、実に喜ばしい。(手書き署名)

### 2. ヘッセ先生による序文

少年の頃に家族から初めてそのことを聞いて以来、ヒルデ・ベルガーとかの女の妹、ロゼの生涯の物語は、

わたしを魅了した。

2人のベルリン人、しかしその2人はドイツ人でなく、いずれにせよドイツ国籍を有さず、とはいえ、劇的な、実存的な仕方で、より良いドイツのための闘いによって刻印された人生を送った。

2人のユダヤ人、その2人は早期にユダヤ教から離れたが、しかしユダヤ人である父親の道徳的勢いとユダヤ人である母親の人間の態度を、まさにより良きドイツのための闘いのなかでもまた持ち続けた。

2人とも、闘いに参加すると、何にかかわり合うことになるのかを知っていた。ヒルデは4歳年上で、ロゼよりもいっそう政治的に能動的であった。

2人とも生きのびた。しかしかの女たちの戦う仲間たちおよび家族は、ほとんど誰も長生きすることはなかった。

2人は自分たちの状況と迫りくる危機を冷静に評価し、与えられたチャンスを大胆に活用し、ようするに再三にわたって幸運でもあり、そしてとりわけ重要なことだが、他の人々に助けられたのだ。

ヒルデとロゼを助けた人のなかには、その名前をかの女たち自身もおそらく知ることがない無名の人もいた。しかし今日のわたしたちがよく知る人物もいた。現在のクルップ基金の代表であるベルトホルト・バイツ、あるいはスティーブン・スティルバークの映画で世界的に知られるようになったアカデミー賞のシンドラーのおかげで、ヒルデもまた、多くの点で、そしてさまざまな仕方で、生きのびることができた。

他の著名な名前も話のなかに登場した。

フランスの社会党首相であったレオン・ブルム (Léon Blum, 1872-1950) は、パリに逃避していたロゼの夫を、戦争が始まった時点で入るように指示されていたフランスの敵国人収容所に入らなくて済むようにした。

プラスツォウ強制収容所長で、サディスティックな殺し屋だったアモン・ゲト (Amon Göth, 1908-1946) は、気晴らしのためにヒルデの仲間の受刑者を射殺した。映画「シンドラーのリスト」においてもまた見られる場面である。

その作品は近年、多くの批評家によって世界的文学であるとみなされているポーランド系ユダヤ人作家ブルーノ・シュルツ (Bruno Schulz, 1892-1942) と、ヒルデはドロホビッチのゲッターで友人になった。シュルツはその後、街頭「行動」のなかで、1人の親衛隊員によって復讐心で射殺された。シュルツへの復讐心からでなく、シュルツを雇い、保護していた別の親衛隊員への復讐心から。実は、その別の親衛隊員は、シュルツを暗殺することになった親衛隊員が雇い、保護していたユダヤ人を射殺することを許可していたのだ。「俺のユダヤ人を殺害したら、お前のユダヤ人を殺害するぞ」というモットーにしたがって。

ヒルデの後の夫で、そして以前のベルリンの闘争仲

間であったアレックス・オルゼン (Alex Olsen) は、1938/1939 年にはなんとメキシコに亡命していたトロツキーの秘書として働いていた。トロツキーがかれにメキシコからニューヨークの知人のところに行き、そこで図書印刷で生計をたてるように助言をするまでの期間であったが。いずれにせよトロツキーとの関係はすぐに終焉を迎えたのであった。アレックス・オルゼンはトロツキーの忠告に従い、そしてその後ニューヨークで戦後、ヒルデと再会し、2人は1952年に結婚した。トロツキーはその助言の後まもなくスターリンの手先に撲殺された《1940年》。

正真正銘のバイエルンの作家であるオスカー・マリア・グラーフ (Oskar Maria Graf, 1894-1967) は、ドイツから逃げ、ニューヨークで生活し、そして戦後の数十年間に「常連会合」(Stammtisches)の中心人物となった。その「常連会合」のためにドイツ人亡命者たちが交替でそれぞれの私邸に集まった。メンバーがすでに亡くなり始めていたその最後の数年においても、「常連会合」はドイツにおいてマスコミの熱心な関心の的であった。図書出版において、そしてテレビのルポタージュにおいて。

アルフレート・ビオレク (Alfred Biolek, 1934-) はヒルデとアレックスをかれの人気あるテレビ対談番組 (Boulevard Bio) に招待し、そして2人に何百万という視聴者にたいして人生を語る機会を提供した。その数日後、2人がコンスタンツのわたしの自宅を訪問したとき、人々がかれらに気づき、そして語りかけた。2人から聞いたことについての自分たちの考えを語り、そして人間的な感動を伝えるために。

さらにそのテレビ放送の影響とは無関係に、ヒルデ・ベルガーの人生はこの間に学問的・文学的興味の対象となっている<sup>1</sup>。

2010年にニューヨークで亡くなったかの女のいとこであるゲルダ・シュラーゲ (Gerda Schrage, 1920-2010)の運命はクヌト・エルシュターマン (Knut Elstermann, 1960-)によって伝記小説『ゲルダの沈黙 生き伸びたある女性の物語』のなかで印象的に描写された<sup>2</sup>。その小説を原作とするブリッタ・ヴァウア

ー (Britta Wauer, 1974-)による同名の映画 (2009年)は好評を得た。

ヒルデはかの女が生きているときひとつのことを欲していた。すなわち、留保なしに、冷静に、自己批判的に、指図あるいは制約なしに自分で考え、そしてそれによって行為することである。すでにユダヤ正統派の父親との最初の対決のなかで、そのことは明確となる。かの女はその父親を尊敬してはいたが、しかし父親から押しつけられる「子ども用信仰」をかの子は断固として拒否した。

その基本モチーフはヒルデを、わたしにはそう思えるのだが、かなり首尾一貫的にかの女の精神的発達のある局面から次の局面へと導いた。すなわち、正統派信仰からシオニズムへ、シオニズムから社会主義的シオニズムへ、そこから共産主義へ、それからトロツキズムへ、そして最終的に民主主義と政治的要求をとまなう生活形式としての自由思考の理念へと。

その際、個々の段階はヒルデにとって理論的な思考の熟練ではなかった。ヒルデは常に、それぞれの段階を生きようとした。そしてしかも十分な社会参加と相当な首尾一貫性で。かの女は道徳的に高潔で、そして決して節を曲げたくはなかった。

かの女は成し遂げたのか。しかもあの時代に。

わたしは成し遂げたと思っている。いずれにせよ、わたしが見出したように、驚くほど価値豊かで、尊敬すべきレベルで。

しかしかの女の人生もまた悲劇的な矛盾、緊張および誤謬を免れることはなかった。

ヒルデ・ベルガーはシンドラーのリストに掲載された。というか、かの女は自分自身の名を、かの女の当時の友人の名を、そして若干の他の友人たちの名をタイプで書き込み、そしてそのかわりに他の何人かの名を削除したのだ。そのことが当事者にとって何を意味するのかを確かに知りながら。生涯を通じて、ヒルデはそのことを気に病んでいた。もつともなことである。

しかし、わたしたちなら現実にはほかの何かができただろうか。

ベルリンでの地下活動の時代、ヒルデは、ゲシュタポがかの女の両親ときょうだいを一族の連帯責任として捕縛し、そしてかの女が自分の信念で、そして家族への配慮なしにナチスに敵対していることへの責任をとらせるかもしれないということを我慢しなければならなかった。

ヒルデは戦後、「脱ナチス化」の時期に、ベルトホルト・バイツの素行証明を拒絶した。かの女を支え、そしてかの女の命を救い、かの女を人間として評価し、そしてかの女によっても人間として評価されたあのバイツを。ヒルデはベルトホルト・バイツについて、か

<sup>1</sup> Vgl. Thomas Sandkühler: *«Endlösung» in Galizien. Der Judenmord in Ostpolen und die Rettungsinitiativen von Berthold Beitz 1914-1944*. Dietz Verlag, Bonn 1996; ders.: *«Berthold Beitz und die <Endlösung der Judenfrage> im Distrikt Galizien 1941-1944»*, in: Gerhard Hilschfeld und Tobias Jersak (Hg.): *Karrieren im Nationalsozialismus*. Campus Verlag, Frankfurt am Main 2004, S.99-126; Peter Berens: *Trotzkisten gegen Hitler*. Neuer ISP-Verlag, Köln 2007; Steffen Mensching: *Jacobs Leiter*. Aufbau-Verlag, Berlin 2003.

<sup>2</sup> Knut Elstermann, *Gerdas Schweigen. Die*

*Geschichte einer Überlebenden*. Be.bra verlag, Berlin 2005

れがナチスでなく、そして自分自身への大きなリスクを甘受しつつ、かの女以外にも多くの他のユダヤ人を救ったということを知っていたのに。

ヒルデにはそうする権利があったのか。もちろんそんな権利はなかった。そしてかの女もまたそのことを後に悟り、そして責任ある対応をした。

当時かの女にそうさせたのはかの女の道徳的厳格主義であり、聖人のような「独善的」主張（この「独善的」という言葉を、かの女は他の箇所でも自分自身に適用した）である。そのような主張をヒルデは自分自身に設定し、そしてそれはベルトホルト・バイツの場合には徹底的には成就されていないと思いこんでいた。

ただし当時のヒルデの状況は、道徳的に考察すると、ベルトホルト・バイツのそれに比べると、はるかに単純であった。かの女は要するに虐げられている人でしかなかった。それにたいしてバイツは、かれがドイツ軍に占領されたポーランドで指導すべき大企業、絶対的権力を有する親衛隊およびゲシュタポの利害と、可能な限り多くの人の命を救済したいというかれの願望との間の実際的均衡を、常に追求することを強いられていた。

わたしがみるかぎり、ヒルデに当時、バイツから懇願されていた宣誓供述を拒ませたのは2つの留保であった。その2つの留保ともわたしには、前もって語るなら、こじつけのように思える。ヒルデもまたそれらの留保を後には、もはや保持し続けることはなかった。

ボリスロウでの2人の最初の出会いにおいて、バイツはヒルデのために、ゲシュタポによってすでに封印されていた家のドアを開けられるようにした。その家からは、数日前にかの女の両親と姉レギーナが連行され、そして5000人のその他のユダヤ人と一緒に絶滅収容所に運ばれていた。それによりヒルデは最後に、こまごました持ち物をしっかり確認し、そして家族と「お別れ」をすることができた。

当時、バイツはヒルデに、どうしてこのようなことが起こりえたのかを理解しなければならないと語った。戦争推進者が、世界ユダヤ人組織もまたそうなのだが、ドイツを戦争に引き込んだのであろう。この戦争で、かれ自身の両親が連合軍の爆撃の下にあるハンブルクで命を心配せざるをえないだろう。とはいえユダヤ人もまた苦悩を引き受けなければならないということは不思議なことではないであろう。たとえその大多数は確かに、かの女の両親やかの女の姉妹がまったくそうであるように、無実であるとしても。以上のようにバイツは語ったのだ。

ヒルデ・ベルガーはこの本のなかでテキストとして再現されている対談のなかで、ベルハルト・バイツについて、かれがナチスでなく、そしてかれが上のような言葉をひよとしてある理由からのみ語ったということを知っていたということを繰り返し強調している。その理由とは、かれはヒルデをまだ知らず、したがっ

てまた、かの女が、場合によっては体制批判的なかれの意見を、ゲシュタポに密告し、あるいは少なくとも潜在的な圧力をかれに行き届かせるために利用するかもしれないと、思っていたからというものである。

そのヒルデ自身によってバイツ擁護のために挙げられた論拠は、わたしにはまったく納得できるものであるように思える。

そのようにしてヒルデを無辜の家族が犠牲になった破局との直接的対峙から目を逸らさせ、そしておこなわれている犯罪をより大きな関連のなかに置き、そしてそれによって、間違っただけではあるのだが、その犯罪を確実に相対化する一般的・政治的観点へと、かの女の思考を導こうとすることは、おそらく不器用な試みでもあった。あるいは、ヒルデの身に起こっているのと類似していることが、我が身にも起こっている誰かとして一その点ではかれの両親もまた死の危機にさらされていた一かの女と連帯することは、自然な、無意識の試みであった。

後に、2人がより親しくなり、そして互いに信頼できるようになったとき、かれはかの女にたいして包み隠すことなく、率直に、かの女の周囲で起こり続けている犯罪について発言し、そしてそのような犯罪に対するかれの嫌悪を疑わせなかった。

第2の留保は、かれが2度あるいは3度の機会において《求められていない》見返りをユダヤ人から受け取っていたということにかかわっている。ヒルデは自分では目撃していない。しかしバイツを大恩人だと思っているユダヤ人たちが、かの女に2度か3度のように語ったとのことである。ヒルデはバイツが1度でもかれの援助を、見返りを求めておこなったとは主張せず、そしてかれがいかなる見返りがなくても助けたし、そして事実、自分自身にとっての大きなリスクにもかかわらず、繰り返し新たに助けたということを知っていた。狼狽した何人かのユダヤ人がかれに単純に何かお金あるいは装飾品を押しつけただけだったのだ。というのはそのユダヤ人たちは「良き商人風」に、自分が欲することにたいして公平に、見返りもまた提供しないといけないという見解をもっていたのであろう。

そのユダヤ人たちは、わたしはそう考えるのだが、そこにおいて同時にある種の同権者としての承認をみようとしていたのだ。かれらは等価値のものをもたらずことで、かれらは、いずれにせよ象徴的であるのだが、単なる寄る辺ない物乞い以上の者でありたかったのだ《もっともバイツはかれらを、そしてそのことは道徳的に重要なことなのだが、また寄る辺ない物乞い以上の者として助けていたのだが》。ヒルデ・ベルガーはそのようなユダヤ人のメンタリティーを慇懃無礼に「代償 (Quidproquo) メンタリティー」と名づけた。ヒルデ自身はその解釈に与していないが。

さらにそのユダヤ人たちには、親衛隊 (SS) あるいはゲシュタポが、かれらから遅かれ早かれ、きっとど

っちみちすべてを奪うだろう—そしてその上さらにかれの命も—ということが意識されていたかもしれない。というのは、かれらは、自分のお金を早めに役立たせたいと欲したのである。

ヒルデ自身は、自分たちの上司のいわゆる右腕であるかの女に何かを提供されたとしても—そういうことは再三あったことだが—、何も受け取らなかった。とはいえ、かの女はお金があれば良いという気持ちはとても強かった。それによって森の中の自身および友人たち用地下隠れ家建設のための資金を支払うために。

ヒルデはバイツに、かれがかの女を守り、そして命を救ってくれたことに、一切見返りはしなかった。ただ1度だけ、かの女はかれにささやかな贈り物をしたことがあった。すなわち、かの女の妹、レギーナが親しんでいた民族音楽のレコードを。

それゆえヒルデ・ベルガーもまた、おそらく彼女が当時非常に軽蔑した「代償思考」から完全には自由ではなかった。

どういうわけで感謝と「代償」の間に明確な分離線を引こうとするのか。

バイツに当時、命を救われたユダヤ人の多くはかれに戦後、イスラエルやその他の国から感謝の書簡やしっかりとした称賛の歌を送った。そのなかには、ヒルデ・ベルガーの話によれば、かれにお返しを押しつけることに成功した人たちもいた。

ヒルデ・ベルガーは後にかの女の当時の態度にたいして遺憾の意を表明し《テキスト1とテキスト3を参照のこと》そして、わたしがかの女から聞いて知っているように、そのことを恥じていた。

ヒルデにとってすでに当時、かれの願いに拒否の回答に踏み切ることが容易ではなかったようだ。かの女は眠れない何夜かを過ごした。そして、もしかの女が自分の拒絶によってかれに具体的な損害を加えるということが分かっていたのであれば、すでに当時違った反応をしたであろう《テキスト1とテキスト3を参照のこと》。

ヒルデ・ベルガーはこの本で再掲されているすべての対話のなかで、ベルトホルト・バイツという名前を暴露することを拒否している。そのかわりに英語のオリジナルでは別の名称《[the director], [my boss]等》あるいはXという人 (ein X) という表現を使用した。ヒルデは、わたしに語ったように、かの女の拒絶がなんらかの迷惑を与える嫌疑へのきっかけを与えるということを阻止するために、そうしたのだ。かの女はその拒絶を恥じ、そしてかの女の当時のこじつけで引合いに出された留保が後から、バイツの名前と結び付けられるのを阻止しようとした。そのことは、わたしは思うのだが、かの女に名誉を与え、そしてまた、かの女自身が数年の経過においてかの女の当時の厳格主義から離れ、そしてかの女もまた一人の誤りを犯しうる人間でしかないということに気づいたというように

考えるときにのみ、筋が通っている。

ベルトホルト・バイツもまたもちろん「ただの一人の人間」であった。当時はさらにそのうえ、ヒルデ・ベルガーもまたそうであったように、非常に若い人間であった。かれはおそらく、ラディカルなトロツキー主義者であったヒルデがそうみなしたかったほどは聖人ではなかった。しかしヒルデ自身もきっと、かの女が当時まだ考えていたほどは無謬でなかった。

たとえそうだとしても、そのことはわたしたちを2人に共感させ、そして2人をわたしたちに近づけると言うことができる。いずれにせよ純粹の、汚れない徳は非現実的であり、そしてどっちみち到達不可能である。しかし、わたしたちが目前にさまざまな誤謬と弱点をもつ人間をみると、その人間における模範的なものはすでにむしろ、わたしたちにも可能であるようなものとして見えてくるのである。

## 再現されたテキストについて

ヒルデとロゼの姉妹はお互いに、そしてドイツ語の話せる友人たちとはドイツ語で会話した。ここに掲載したテキストのオリジナルは英語であるというのは、このテキストの成立を願った人たち、すなわちそのためにこのテキストが語られるか、ないし書かれた人たちは英語を話す親戚あるいは友人であるという事情のせいであった。

ヒルデとロゼはわたしに、テキストに手を入れ、そして後世のために保持することを許可してくれた。というのは、わたしはかの女たちに次のことを確信させることができたからである。すなわち、かの女たちの証言は簡単にデンバーないしニューヨークのユダヤ人博物館の保管庫で埃をかぶるべきでないこと、それらは本来的にドイツに属すること、それらはわたしたちドイツ人に関係があること、それらはわたしたちに語りかけていることを。

ロゼは何度か、魅了されて傾聴するわたしの学生たちの前でかの女の人生について語ってくれた。適当と思えた機会があれば、わたしは講義や講演のなかでいつも、一度は2人の生涯について話をした。ロゼについても、ヒルデについても、ドイツにおいて彼女たちの生涯に関する話がまさに若い人々によってもまた心を開いて、感情移入をして、そして批判的な学習への構えとともに受容されるのを見ることは、大きな喜びであり、そして満足感をもたらすことである。

テキスト1は1980年にヒルデ・ベルガーによって理路整然と執筆された第2次世界大戦終戦に至るまでの生涯に関する報告を翻訳したものである。この本に掲載した個々のテキストを個別に読んで、そして理解することは確かに可能であるが、わたしはしかしテキスト1を最初に読むことを提案する。というのは、それは簡潔な概観を提供するからである。

テキスト2は、ニューヨークのジャーナリストで、そして配偶者オルゼンの友人であったマーク・スミスがヒルデ・ベルガー（・オルゼン）と実施したインタビューを起こして、テキスト化したものである。それは1935年までのヒルデの歴史を扱っている。1935年のはかの女の弟であるハンスが政治的地下活動を理由にゲシュタポによって逮捕された年である（ハンスは禁錮9年の有罪とされた。1942年12月29日には、かれは刑務所からアウシュヴィッツに送られた）。

テキスト3は、メキシコのシワタネホの海辺で1997年1月に実施されたある対話の録音を起こしたものが基礎になっている。参加したのは、メアリー・ツイリン、その夫であるハロルドおよびヒルデとロゼの姉妹である。ハロルド・ツイリンはパサデナのカリフォルニア工科大学の宇宙学教授であった。かれの母親とヒルデ・ベルガーの母親はいとこ同士であった。何度もヒルデとかの女の夫、アレックス・オルゼンは冬の2-3か月をメキシコで過ごした。友人たちや親せきの人たちと一緒に。その人たちのなかには、ナチス時代と戦争中にヨーロッパから亡命してきた数名の人もいた。その対話は生活状況に関する明瞭な印象を媒介してくれる。そのことは、他のテキストでは言及されていないか、あるいは大雑把にしか言及されていない。ダニエル・ゴールドハーゲンの『ヒトラーの自発的死刑執行人たち』（*Hitler's willing executioners: ordinary Germans and the Holocaust*）とスティーブン・スティルバークの映画『シンドラーのリスト』が発表され、そして評判をえた。ヒルデにとっては、もちろん特に映画が興味深かった。というのは、その映画はかの女自身の生涯の一部を扱い、そしてかの女の名は、話題のリストに書かれ、そしてそのようにして自らを守った。

テキスト4は、メアリー・ツイリンが1997年春にロゼ・ベルガー（・レーツ）を相手に実施したインタビューを再現したものである。主眼点はロゼのベルリンから、パリのかの女のドイツ人友人で、そして後に夫となるアーサー・レーツのところへの逃避、アーサー・レーツのフランス抑留収容所からの解放と軍隊での徴用、ロゼのパリから南部への逃避行、かの女のそこでのただ生きのびるための闘い（当初は一人での、その後はかの女の夫との、そして最後にはかの女の1943年に生まれた息子も伴っての）、待ちに待った終戦、そしてベルガー家で生き残った2人、つまりロゼ自身と姉のヒルデの再会であった。

テキスト5は、ロゼとかの女の、その間に亡くなった夫、アーサーと友人であったアメリカ人夫妻の娘であるジャーナリスト、クラレンス・マクリモンズが2005年8月、ロゼの亡くなる数か月前にヴァージニア州のシャルロッテヴィルで、ロゼを相手に実施したインタビューである。テキスト4において放棄されていたものがラフな形で復活し、しかし重要な新たな細

事も含んでいる。

わたしはテキスト1と5を完訳した。他のテキストでは、抄訳した。それらの場合、繰り返しが存在し、あるいは重要でないことも存在する。さらに英語のオリジナルのテキストには、読みにくい個所、あるいはまったく読みとれない個所が存在した。

ヒルデ・ベルガーは、上ですでに述べたように、かの女の私的な範囲で、そして普段もベルトホルト・バイツの名をあげることはない。それに応じた対応を、わたしも翻訳においておこなった。かの女が出版を同意しつつ話してくれた後、編集者としてのわたしにとって、その事情をどのように処理すべきなのか、という問題があった。インターネットの時代には、名前を見つけることは数分の営みである。すでにその理由から、秘密ごっこは噴飯ものだろう。さらにわたしは、何も隠すことはないという意見の持ち主である。ベルトホルト・バイツは1973年にイエルサレムのヤド・ヴァシェム記念碑により「諸国民のなかの正義の人」として顕彰された。その荣誉は、わたしの意見では、正当である。わたしはヒルデ・ベルガーに問うたことがある。かの女もまたそれに同意するかと。かの女の答えは自発的でそして明快であった。「もちろん。いったい何が問題なの？」

写真の部分（付録）にはスナップ写真や記録文書が掲載されている。それらは、もちろん非常に断片的でしかないとしても、2人の主人公自身について、かの女たちの近くにいた人々の何人かについて、そして外的な生活状況および重要な出来事（それが例えば職務上の記録文書において、あるいは個人的な書簡において言及されている範囲で）について直観的な印象を提供するであろう。それらは、うまくいっているはずだが、年代史的に並べられている。資料の一部は、わたしがヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーから、さらにロゼの息子であるゲネ・レーツからえたものである。若干の写真は、わたしがデンバーないし今日のウクライナ領ボリスロウへの旅行の際に、そしてヒルデとロゼのドイツ訪問に際して、撮影したものである。ベルトホルト・バイツのヒルデ・ベルガー宛て書簡はヒルデ・ベルガーからわたしに委ねられた。その転載は書き手であるバイツの承認を得て行われている。

## I ヒルデ・ベルガーの物語り

### 1. テキスト1：ヒルデ・ベルガーが自身の生涯(1914-1915)について語る

ニューヨーク 1980年11月24日

わたくしは1914年7月に4人の子どものなかの2番目の子としてベルリンで生まれた。両親、ナタン・ベルガーとザラー・フロイントは1912年に、カルパティア山脈の麓にある小さなポーランドの小都市であるシュトルイからベルリンに引っ越してきた。



父は仕立屋である。父はベルリンで仕立屋店を数人の女性従業員を雇用して開いた。安息日を厳格に守った父には競争能力はなかった。したがって父は婦人服のための小売店で商売しようとした。商売は何より母によって営まれた。母はドイツ語を父よりも話せたし、父以上の商売のセンスを有していた。父は根本的にあらゆる商売的なものに関心がなかった。かなり信心深い正統派ユダヤ教徒として、父は自身の生活内容を、神に仕えそして子どもたちを良きユダヤ教徒に教育することであると考へた。わたくしは、隣人および父の兄弟たち（その人たちもまたベルリンに引っ越してきていた）が父について、相当に熱心かつ敬虔なユダヤ教徒としての自己の義務を念頭においていた「ハシデイム」（18世紀後半に東ヨーロッパから始まった敬けんな運動から生じた正統派ユダヤ教徒の教派）であると語っていたことを覚えている。

わたくしたちが住んでいた地区はユダヤ人地区ではなかった。それはコトブスサートアーにあった。住民は労働者、中間層の中位以下の人々で構成されていた。わたくしたちはかなり貧しく、そして両親にとって、4人の子どもを満足に食べさせることは困難であった。

10歳の年齢までわたくしは民衆学校に通っていた。担任の先生は母に、学級で一番素質があるわたくしが上級学校に進むべきであると納得させた。母は近所の女子高等学校（Lyzeum）の校長に会いに行き、そして校長に談判した。わたくしたちは貧しく、そしてかなり高額な授業料を工面することは困難であると。それゆえに、そして担任の先生の明確な推薦ゆえに、授業料は実質的に半分に減額された。女子高等学校に1924年から1930年の卒業まで通った。わたくしは語学系の教科と歴史で最高の成績をとった。

1916年生まれ弟ハンスとわたくしは、きょうだいのなかで自分たちのことを最もよく理解していた。かれは才能ある若者だった。かれは高等実科学校に進んだ。そこでも、母はわたくしのために行ったのと同様の授業料減額を実現した。

父の唯一の関心はユダヤ的生活とユダヤ教であった。かれの講義はトーラ（モーセ五書）とタルムード（ユダヤ人の律法の集大成）から構成されていた。近代的な生活や若者にたいする理解はまったくない人であった。20世紀のベルリンにおける父の生活スタイルは、以前のユダヤ人シュテトル（かつて東欧にあったユダヤ人の小さな村）におけるのと同じであった。父はわたくしたちにたいして非常に厳格で、そしてわたくしたちがユダヤの法を一言一句遵守するように期待した。母は、子どもにも、近代を的ベルリンにもより理解があった。もっとも母もまた厳格かつ敬虔であったが。母はわたくしたちと父の仲を取り持とうとした。

女子高等学校に進む前に、わたくしはあるシナゴークグループに参加した。そこには若者向けの特別なプ

ログラムが存在した。わたくしたちはヘブライ語の詩を学んだが、しかしドイツ語の詩やフォークダンスも学んだし、ボールゲームやその他の多くの活動も行われた。それによってわたくしには別の世界が開かれた。

シナゴークグループには数人のシオニズムの若者がいた。その若者たちはわたくしたちを徐々にシオニズムへ回心させた。わたくしたちは当初、「青・黄色」《ユダヤの色彩にならって》と名付けられたシオニズムグループに属した。

そのグループはその後、シオニズム社会主義者による影響を受けた。そこでわたくしは初めて社会主義思想に触れた。マルクスとエンゲルスを読み始め、そして年少の子どもたちのリーダーになった。その子どもたちに、わたくしは社会主義的思想教材の初歩を伝授した。わたくしは社会的諸問題に敏感で、そして、敗戦後の社会はいかに騒乱状態にあったか、そしてインフレ、失業率の高さ、そして酷い教材状況が支配していたことを心に留めた。わたくしは、飢餓行進、デモおよびナチスと社会主義者と共産党系労働者の間で街頭闘争があることを理解していた。その時代、1931年ごろ、ユダヤ人問題のみに取り組むことでは物足りないことに気づいた。わたくしはそれを超越する諸活動に参加し、人類そのものを勝利に向かうよう手助けし、ドイツ社会を変革し、ドイツ労働者を支援し、そして世界を改善したかった。

そのような傾向は社会主義・シオニズム組織“Brith Haolim”（ユダヤ語、「立ち上がる者たちの同盟」の意）内部の野党派の形成と軌を一にしていた。そのことが、共産主義青年同盟の委託をうけて合流していた、わたくしよりもおよそ3歳ないし4歳若い一人の若者の登場と関連していたことを、わたくしたちが理解したのはようやく後日のことであった。かれは巧みで、わたくしたちの一人ひとりに個人的に関わり、わたくしたちの当初はかなり不明瞭であった野党的態度を強化した。かれは周囲の絶望的な社会・経済的状况を明確にしてくれたのだ。そのようにして、わたくしたちは“Brith Haolim”内の自立した能動的なグループへと発展した。わたくしたちは秘密の会合をもった。そこでは当面の数か月に係るわたくしたちの野党的活動の戦略が作成された。

最後にドラマティックな論争があった。そのクライマックスで、弁舌さわやかな仲間の一人が“Brith Haolim”との決別を次のように宣言した。わたくしたちは、ドイツ労働者の階級闘争に能動的に参加することを決断し、そしてそれゆえ共産主義青年同盟に参加する、と。わたくしたちはそのことを「赤い同化」とよんだ。

わたくしにとって、“Brith Haolim”から去ることは重い決断であった。わたくしはその組織に強い情動的結びつきをもち、そして何よりも共同体精神、キブツ（イスラエルの集産主義的協同組合）に似た生活、満

足できる長年にわたる同い年の者たちとの個人的関係が好きだった。全員、わたくしたちは同じ思想にとらわれ、全員、社会主義を支持した。わたくしが個人的に結びつきを感じ、そして称賛していた人々を失望させたことが分かったとき、思わず泣いてしまったことを覚えている。しかしわたくしは、そのような友人たちとの、つまりわたくしの「ハベリウム」（“平和”を意味するヘブライ語）との断絶がわたくしの人生における重要な転換点を意味しているということもまた認識していた。

同時に革命的労働運動、つまり労働者階級の前衛に参加したことを誇りに思った。わたくしは革命歌の1つにおいて「地球の6分の1が赤い」と歌われているように、ソ連邦における10月革命をもたらした運動の一部になったことに感謝した。そのようにわたくしを共産党に引きつけたのは、ロシアで成功しそして、当時わたくしはそう信じていたのだが、ユダヤ人問題をもまた解決するのであろう力強い、世界規模での運動の一部でありうるという事実であった。わたくしは当時、ユダヤ人とよりも、むしろ社会主義者や共産主義者と多くの共通点があるという感覚を持っていた。ユダヤ人について言えば、その多くは宗教的で、そして少なからずは、反動的かつ偏見に満ちていた。言い換えれば、わたくしにとってユダヤ人の運命とかかわることは十分ではなかった。というのは、わたくしは偶然、ユダヤ人として生まれたのだから。わたくしは広範な運動の一部でありたいと思った。わたくしの志向は、周囲の人々の悲惨な生活条件を改善することであった。その際、搾取の無い社会、戦争の無い社会、イデオロギー的、人種主義的あるいは政治的に動機づけられた迫害のない世界を創造することを手助けしなかった。わたくしはわたくしの家庭における教育から絶対的に離脱していた。家では宗教的テーマに関するわたくしの問いへの答えはいつもこうであった。「質問をするな！」および「書かれていることだ。」

さて、わたくしはそのようにして身近な地区の青年共産主義者同盟のある細胞に加わり、そして早くもすぐに失望することになった。全体的な雰囲気はわたくしを驚かせた。わたくしは青年共産主義者同盟の道徳的姿勢が好きでなかった。わたくしたちがさまざまな思想について論議していた“Brith Haolim”におけるのとは違っていた。青年共産主義者同盟の関心事は、どのようにして労働を得て、そしてどのようにして労働条件や給与を良くすることができるのかであった。そのことはもちろんわたくしたちの闘争の重要部分であるが、しかしすべてではない。

“Brith Haolim”におけるわたくしたちのグループは確かに解散し、そして全員が、居住地区に応じて、青年共産主義者同盟のさまざまな細胞に加わった。にもかかわらず、わたくしたちは依然として友人であり、そして何よりも日曜日に会った。ベルリンの周辺で自

然を楽しむために。

一方ではわたくしの感情、そして他方では共産主義者グループの義務の間の葛藤は、わたくしの短い所属の開始後すぐに生じた。しかしわたくしは、それを克服しようとした。それがプチブル的感情以外のなものでもない自分に言い聞かせることで。そして、わたくしはすべての可能なデモや反ファシズム街頭闘争に参加した。KPD（ドイツ共産党）へのわたくしの失望が最大になった時期に組織された“飢えと寒さにたいする行進”を思い出す。同時に同志たちが、わたくしのために何を持ち帰ろうかと尋ねたことも。というのは、そのような行進は、さまざまな小売店を略奪するために利用されていたから。わたくしは仰天し、そして同志たちに、それは階級闘争を行う正しい仕方ではなく、そしてわたくしたちは、たとえ搾取されているにせよ、別の倫理的価値を持つべきであることを確信させようとした。同志たちはわたくしの「お説教」を笑い、そしてわたくしを否定的に、そして敵意むき出しで「インテリ」とよんだ。

わたくしは好んでイデオロギーや原理について論じたので、直ちに若者たちをSPD（ドイツ社会民主党）運動から、そしてその他のグループからわたくしたちのために獲得するという使命をえた。わたくしは党の路線を擁護することに問題があると考えていたとはいえ、わたくしは外に向けては、間違っていると分かっていた行動した。しかし青年共産主義者同盟の党幹部たちのわたくしの批判にたいする反応は、わたくしの失望と後の回心の始まりのきっかけとなった。

1932年の初め、ナチズムがすでに大衆運動となり、そしてそれに起因する危険が明確になっていたとき、つまり継続的に街頭闘争がナチスと社会民主党あるいは共産党との間で存在していたとき、ナチスを克服するには唯一の方法しか存在しないことが明らかとなった。すなわち社会民主党と共産党がイデオロギー的相違を忘れ、そして共通の敵に抗して同盟を組まねばならないことが。

当時、わたくしは、さまざまな細胞で編成されたわたくしの地区において、「アギトプロブ」（アギタチオン+プロパガンダ=扇動と宣伝）を担当した。わたくしは、若い社会民主党員と共産党員を増大するナチスに抗して統一させるために、最良の方略をみつけようとした。しかし若い共産党員の指導者は次のように回答した。「統一はわたくしたちの（共産党の）指導の下でしかありえない！」と。

社会民主党は労働者階級をすでに1914年に裏切った。それはSPD指導部の多数派が帝国主義戦争を支援したときである。戦後の数年間において右翼・反動勢力と連携したSPDによる左派急進主義的労働者たちへの暴力的・流血的攻撃があった。さらにはベルリンの社会民主党の警察大臣による5月デモの弾圧。その大臣は警察官に、平和的にデモをしている労働者を



撃つように命じた。かれはドイツの労働者の伝統的な祝日である5月1日のデモンストレーションを初めて禁じた人物であった！その日に31人の労働者が警察官によって殺害された。

KPDの論拠はしたがって、社会民主党は革命的政党であることを止めたというものであった。社会民主党の主要目標は社会を変革することではなく、社会を修正することであるというのである。それゆえ「修正主義」という用語が使用された。少なからずの州では社会民主党自身が政権を取り、あるいは中央党と連立政権を組んだ。そこでは社会民主党は体制を変革するとか、あるいは社会の主要問題を解決しようとしなかった。当時しばしば聞かれた言い回し、それはSPDによって主導されたもっとも強力な労働組合の1人の指導者に由来していたのだが、わたくしの耳にまだ残っている。「わたくしたちは資本主義の医者でありたい。その墓堀人でなく。」

正直言うと、わたくしはSPDのイデオロギーと実践へのKPDの批判を受け入れた。にもかかわらず、わたくしは、2つの強力な労働者党にとって、危険なヒトラー運動に抗して団結することは絶対的に必要であると考えた。しかしKPDのスローガンは「労働者階級の主要な敵である社会ファシスト（社会民主党を揶揄した表現）を打倒せよ！」であった。わたくしは十分に純朴であったので、その、わたくしの考えでは破壊的な共産党のコンセプトに反対し、そしてそのようにして青年共産主義者同盟の機構と衝突した。その機構は、KPDにたいする路線の忠誠求め、そしてKPD自身と同様に厳格であった。わたくしを最も興奮させたのは、批判的発言の禁止であった。わたくしの疑問への回答はといえば、「きみが党の路線に賛成しないならば、きみ自身は組織の外に位置し、そしてわたくしたちの敵である」というものであった。再び、わたくしは反知性的な、そしてそれどころか反ユダヤ主義的響きを聞いた。青年共産主義者同盟の指導者のうちの何人かはユダヤ人であったにもかかわらず。

この厳格な、非和解的な態度はわたくしを深く狼狽させ、そして宗教やユダヤ法、それらはわたくしに思考することを禁じるものであったが、に関するわたくしの突き刺すような問いへの父の反応を思い起こさせた。わたくしは思考を止めたくなかったし、そして自分の考えたことを表現することを止めたくなかった。

したがって、わたくしは意識的に、左翼急進派グループと結びつこうとした。それらのグループとは、わたくしはたまたま、あちこちで出会ったことがあった。わたくしがもっとも気に入ったグループはトロツキー主義者であった。わたくしはトロツキー主義者の文書を読み始めた。最初は、KPDの路線を激しく非難する短いパンフレットを、その後はソ連や国際共産主義運動におけるスターリン体制に対する批判的文書を。わたくしは1905年のロシア革命と10月革命について

のトロツキーの本を、なぜ10月革命に至ったのか、そしてあらゆるマルクス主義的予言に抗して、もっとも遅れた、もっとも工業化されていない社会においてプロレタリア革命の勝利に至ったのか、に関するトロツキーの分析を読んだ。わたくしは、レーニン死後、スターリンはどのようにして権力を得たのか、スターリンがどのようにして、KPD内部でイデオロギー論争を行うことを可能にしていた「民主集中制」の原理を廃棄したのかを知った。わたくしは、スターリンが次第に陰険に10月革命の他のすべての指導者を抹殺したのを知り、《なんとまだ1930年代の悪名高い粛清以前の》共産党内部のあらゆる敵対派にたいするかれの極悪非道で、情け容赦のない抑圧について知った。

わたくしがそのすべてを、ベルリンの青年共産主義者同盟における雰囲気や実態と比較したとき、わたくしにはすべてが明らかになったと思えた。そのとき、わたくしには、自分がどこに属するのがふさわしいのかが分かった。トロツキーの理論の迫りくるような論理とは別に、かれの光輝く執筆スタイルもまた、わたくしをひきつけた。その執筆スタイルは、わたくしがドイツの共産党指導者のものについて読んでいたすべてをはるかに凌駕するものであった。《不公平にならないように、付けくわえなければならないが、わたくしはトロツキーのテキストを、KPDの刊行物において、KPDの指導者であったエルンスト・テールマンあるいは青年共産主義者同盟の幹部の演説においてみられた粗野な宣伝と比較していた。》そのころから、つまり1932年半ばから、わたくしはトロツキー主義者の目標を自分のものとした。

(この項未完)

(2018年8月28日受理)